

【書評】澤田直 [編] 『サルトル読本』 (二〇一五年、法政大学出版局) 新しいサルトル像を求めて

OKIMOTO, Tatsuya / 沖本, 龍哉

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

56

(発行年 / Year)

2017-03-20

新しいサルトル像を求めて

本書は、二十世紀フランスの哲学者・作家ジャン・ポール・サルトルを対象とした「読本」である。これまで「読本」シリーズの書物では、狭義の意味における哲学者が対象とされてきたが、サルトルといえば、第二次世界大戦の直後から世界的に活躍した作家・思想家というイメージが強いかもしれない。

哲学者としてのサルトルは、一般的に、その後の構造主義や脱構築の立場からすると、一昔前の実存主義者として未だに考えられているように思われる。サルトルを専門としない筆者も、少なからずそのような印象を抱いていたが、本書を紐解き、最新のサルトル研究を目の当たりにする読者は、こうした印象がいかに通俗的で時代遅れなものであるか、実感することになるだろう。

沖 本 龍 哉

サルトルについての専門的な研究が盛んになるのは、サルトルが死去した後、八〇年代に入ってからであるが、今日、サルトル受容が新たな段階に入り、次々と斬新なサルトル解釈が生み出されている状況を、この書物は読者に教えてくれる。その状況から見えてくるのは、本書の「編者まえがき」にも記されているように、フーコーやドゥルーズ、デリダへと至るフランス現代思想の流れは、サルトルなしには理解しえないという事実である。

さらに、サルトル研究の最前線の成果が紹介された本書の対象となる読者は、専門家だけではない。本書は、専門家には必読書となることはもとより、それ以外の読者にも新しいサルトル像を提供している。

こうして幅広い読者層を想定したこの書物には、多角的

な構成が試みられている。本書の構成は大きく四つに分けられる。まず、導入の第Ⅰ部「サルトルの可能性をめぐって」では、二十世紀の思想状況を踏まえ、サルトル読解の新たな可能性を探っている。続く第Ⅱ部「サルトル解釈の現状」、第Ⅲ部「サルトルの問題構成」では、原著『存在と無』『弁証法的理性批判』の読解、サルトルの重要な問題構成をめぐる論考が収められている。さらに、第Ⅳ部・第Ⅴ部では、「サルトルと同時代」と題して、ハイドガー、バタイユ、ラカンらとの関係が考察される。最後の第Ⅵ部「作家サルトル——文学論・芸術論」では、哲学以外をテーマとする論考が収められている。なお、巻末には、詳細な文献目録と略年譜が付けられており、サルトルを読む際には、お手元に置かれ、活用されることをお勧めしたい。